

氏名	アブトセミアブドラフマン 阿不都賽米阿不都热合曼		
学位の種類	博士（音楽学）		
学位記番号	博音第155号		
学位授与年月日	平成21年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉十二ムカームの様式研究		
論文等審査委員			
（論文審査主査）	東京芸術大学	准教授（音楽学部）	植村幸生
（論文審査副査）	〃	教授（ 〃 ）	西岡龍彦
（ 〃 ）	〃	准教授（ 〃 ）	塚原康子

（論文内容の要旨）

本論文は、新疆ウイグル族の間で伝承されて来た「十二ムカーム」の研究である。ムカーム *muqam*はウイグルの叙事的組曲であり、伝統音楽の中の一ジャンルである。漢語では「木卡姆」の字を当てはめているが、この語は元来アラビア語の「マカーム *maqām*」に由来する。ムカームにはいくつかの意味があるが、現代ウイグル語では「系統的に集められた一つの体系」つまり、「整えられた音楽の集大成（組曲）」を指す特別の用語である。

本論の目的は大きく二つある。まず一つは、十二ムカームの音楽様式が具体的にどのようなものであるのかを明らかにすること、そしてもう一つは、このムカームがいかなる音楽文化の影響を受けて確立していったものなのかを考察することである。以下、章ごとに概略を示す。

まず第一章では、ウイグルのムカームの歴史の変遷を概観した。とくにウイグルにおけるマカームの成立にあたっては、二つの重要な時期があった。まず一つは、スルタン・アブドゥルレシディ・ハンの王朝時代にウイグル・ムカームが体系化された十六世紀頃である。もう一つは、当時十二ムカームを唯一演奏できたトルディ・アホンの録音を中心にして、ムカームの全体像を明らかにしていった1950年代である。

第二章では十二ムカームに用いられる楽器について説明した。ムカーム演奏に欠かせない旋律楽器として、とくにカルン、サタール、そしてリズム楽器のダブなどについて、その形状や構造について詳述した。

第三章では、十二ムカームの音楽構造の分析をおこなった。本章では、十二のムカームのそれぞれのムケッディメ（それぞれのムカームの基本的な音楽および旋法を提示する必要な不可欠な序曲）の旋法を分析し、ムカームの旋法と音階のほとんどにおいて、一オクターブに二つのテトラコードが存在することを明らかにした。さらに、テトラコードの枠が基礎となっている旋法やペンタコードの枠が基礎となっている旋法、それらの混合など、ウイグルのムカームの旋法の性格は、単純にオクターブ音階に還元することでは捉えられないことを指摘した。さらに、西アジアの旋法を比較対照とし検討をおこなった。西アジアの音楽と同様、特定の音高に潤音（微分音を含む装飾音）を付けることもあるが、それだけでなく、個々の演奏家が恣意的に、即興的に潤音をつけることも許される点は、ウイグル音楽の大きな特徴である。また本章では、とくに十二ムカームの中から、一つの例としてパンジゲームカームをとりあげ、旋法や音階の属性、パンジゲームカームの構造の特徴を詳しく分析した。その結果、次のことが解明された。たとえば、一定の旋法が長く使われることはなく、一つの旋法或はその動機は常に何小節かで消えていく。また、続けて現れるものは、前の旋法が変形したものの場合も多いが、まったく異なる新たな動機が現れる場合もある。このような旋法の使い方は、聞く人の好奇心に常に新鮮なものを

与えてくれるのである。特に、パンジガムカームの場合、その奇妙な増二度を含むテトラコードが大きな特徴となっているのである。

第四章では、ウイグルのムカームの詩の韻律についても検討をおこなった。ムカームの詩は、基本的に、アルーズの体系に基づく詩のバハル（格調）にのっとっている。その原理は短音節と長音節の組み合わせによるリズム周期である。無拍のリズムで奏でられるムケッディメにおいて、規則的に回帰する最小単位はフレーズである。これは有拍リズムの拍に相当する。短音節プラス長音節の不可分の結合がこのフレーズのアクセントを形成する。ここにペルシアのアーヴァーズとの共通性を指摘できる。

第五章では、とくにメシュレブに焦点をあてて検討した。メシュレブはムカームの形式の中でチョン・ナグマ、ダスタンに続く第三の部分で、ここで歌と器楽に加えて舞踊が行われる。メシュレブは元来、タクラマカン砂漠周縁のオアシス各地域にある民俗音楽そして舞踊が組み合わせられた一種の活動形式である。お祭りやお祝い、歓送迎パーティなどの時に、村の人々が一堂に集まって、踊り歌うという意味である。メシュレブはイスラム以前から広く行われていた古い習慣であると考えられる識者は少なくない。メシュレブがムカームの一部として組み込まれているのは、ウイグル独特の特徴である。

近代のウイグル・ムカームの歴史を見ると、歌詞の改定や教育方法など、いくつかの問題点がかかえていることがわかる。しかし、これまでの研究は漢民族によるものが主体で、不十分な点が多かった。今後は、ウイグル語の歌詞の言葉や音楽の細かいニュアンスの理解に基づいた研究が必要とされる。本論文は、そういった研究の第一歩として、重要な役割を果たすと考えられる。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、中国新疆ウイグル自治区のウイグル民族が伝承する長大な組曲「十二ムカーム」（オンイキ・ムカーム）の音楽様式を楽器、旋法、リズムの側面から分析してその特徴を明らかにするとともに、この音楽ジャンルがいかなる音楽文化の影響下に成立したかについて考察することを目的としている。本論文が主として取り扱うのは、ウイグル・ムカームのうち最も標準的なスタイルと目され、かつ執筆自身演奏家として親しんできたカシュガル地方の伝承であるが、補論としてドーラン地方のムカームに関する現地調査報告も添えている。

本論は補論を除くと五章から構成される。第一章ではムカームの歴史の変遷をたどり、ムカームが体系化された十六世紀と、トルディ・アホンとその一族の伝承が記録、保護された1950年代とを、ウイグル・ムカームにおける二つの画期とする。第二章ではムカームに用いられる楽器をその構造、素材、製作、改良などの面から詳述する。第三章はムカームの旋法分析にあてられ、①テトラコード、ペンタコードの枠が重要な単位である、②各ムカームは固有の音域と構成音、主音をもつ一方で、一定の旋法的特色が長く持続することはなく、旋律が次々と変化して現れる、③微分音程を含む装飾音（潤音）は西アジアの旋法とは異なり演奏家の裁量に任されている、などの諸点を指摘する。第四章は音節の長短を基礎とするペルシア・アラブ詩の韻律法則がウイグル語の詩に適用され、音楽のリズムにもそれが反映していることを示す。第五章はムカームの第三部分に当たるメシュレブが、歌舞を伴う饗宴というイスラム以前からのウイグル民族の習慣に由来することを説く。

本論の学術的意義は次の点に認められる。①従来もっぱら漢民族主導で進められてきたムカーム研究において、実践に精通したインサイダーという立場と経験を生かしたすぐれた分析・解釈を示したこと（特に第三章、第四章）。②ムカームのリズムと詩の韻律との相関を初めて明らかにし、無拍の部分と有拍の部分とを韻律法の観点から統合的に把握する方策を示したこと（第四章）。③十九世紀の文献『楽師史』を取り上げてムカームの成立史を論じ、それによって今後のムカーム研究における文献資料の重要性に注意を向けたこと（第一章）。④従来ほとんど情報のなかったドーラン・ムカームの実態を明らかにし、他地域のムカームや周辺民族の音楽との比較のために有益な情報を提供したこと（補論）。

本論の文章表現は十分に明快で、論点のバランスも全体としてよく整理されている。しかし、現地調査のデータをはじめ、研究史、書誌、音源などの情報提示や記号の説明が不徹底であること、旋法分析においてその手順が明確でないことは、問題点として指摘せざるを得ない。楽器の改良、潤音の音楽的機能、即興性、メシュレプの歴史的・文化的脈絡、ムカームに見られる文化複合といったトピックについても、より慎重な、かつ広い視点からの考察が求められるところである。しかしながら、本論文において上記のような学術的に意義ある成果を挙げたことは、執筆者の研究的力量を示すものと認められるので、合格と判定する。